

---

# マホ ツカイがいる町

朧月るみ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

マホ ツカイがいる町

### 【Nコード】

N8974K

### 【作者名】

朧月るゐ

### 【あらすじ】

ボクの町にはマホーツカイがいる。

特別なマホーは使えないけど、みんな笑顔になるんだ。

ボクはずっと見ていたい。

アノ子が進む道を・・・

## 始まり

ボクの町には、マホ ツカイがいる。というと、たいていの場合勘違いされる。

「そんなのがいるわけない」「頭イカれてるんじゃないの」と、罵倒される。

もちろんボクだってそんなのがいるとは思ってない。

某長編魔法使いシリーズみたいに杖を持って呪文を唱える魔法使いが現実にはたら世界は混乱と恐怖の渦中に陥ってるだろう。

ボク、五十嵐凌いしがらみりゅうはそう思う。

ボクが知ってるマホ ツカイはそんなファンタジーものではない。ボクの幼馴染である伊十院いじゅういんまき榎。

彼女がマホ ツカイだ。彼女のマホーは、種も仕掛けもあるなんてことない手品。

そういうことをいうと彼女が烈火のごとく怒るので、いわないようになっている。

## 琥珀園

授業終了の鐘が鳴る。一気に教室内が騒がしくなる。

そんな中荷物を片づけていると勢いよく教室のドアが開いた。

「りょーちゃん。今日も行くよー」

大声でズカズカ入ってきたのは、腰辺りまで綺麗な黒髪を伸ばし黒の虹彩を持った少女だ。

「槇、もうちょつと静かに入ってきてって毎回言ってるだろう」

大人しくすれば日本人形見たで可愛いのに、と呟く。

見た目は精巧に作られた日本人形。だが、中身は違う。

幼初期、男友達しかいなかったせい、性格が男勝りになってしまった。

そのことだけが残念だ。

「いいじゃないの。壊れてはいないんだから」

(そういう問題じゃないんだけどな……)

あっけんからんと言う我が幼馴染に溜息を吐きたくなる。

ズキズキと頭が痛いのも気のせいではないだろう。

こめかみを押さえてると、首に手が回された。

「りょーちゃん。親切なマホ ツカイが迎えに来てくれたぜ」

りょーちゃん、と言う人物は槇の他にもう一人しかない。

「……晃輝」

たかはし「うき」  
高橋晃輝。

クラスの人気者兼小中高通しての腐れ縁である。

そこまではいい。そこまではいいんだ。

ここまではまだ許せるし我慢もできる。

だけど、十一年間同じクラスってどう思う？

さすがにイラツときたね。

おまけに、運動神経抜群プラス茶髪茶目の爽やか系。

これでモテないわけがない。

まったくもって羨ましいよ。

反対にボクは、黒髪に黒目の平凡顔……と言いたいところだけど実際はチヨッピリ違う。

髪は普通に黒。眼は、光の角度によって濃い紫色に見えるらしい。知った時は、驚いたよ。後々両親に聞いてみると先祖返りをしたという事だった。

「うざい。暑いからこの手を離せ」

乱暴に手を振り払う。

「ははっ。わりーい、わりーい」

口ではそう言っても反省の色が見られない。

そんな二人のやり取りを見ていた榎は、痺れを切らしたのか、凌の襟首をつかんだ。

「いつまでじゃれてんの。晃輝クン、悪いけど凌貰って行くわねー」

にっこり笑い、思いつきり凌の襟首を引っ張る。

カエルが潰れたような声が聞こえたが、この際は気にしない。

「凌、また明日なー。頑張れよ」

陽気な友人の声をビージーエムに、凌は気を失った。

そんな凌を見て一言。

「ホント……頑張れよ」

小さく呟いた声は、誰の耳にも拾われず、騒がしい空気に溶けていった。

## 琥珀園？

ズリズリズリ。この音なんだろう？

何か引きずってるのかな？かなりの重さなんだろうなあ。

あれ？ボク、何で寝てるんだろう？さっきまで学校にいたのに・・・。

確か、いつものように槇がドアを壊す勢いで開けて、いつものように晃輝とじゃれて、キレた槇がボクの襟首を思いっきり引っ張って・・・。

「槇！なんてことしてくれるんだ！」

ボクを引きずりながら移動している彼女に抗議の声を上げる。

「あ、起きた」

「『あ、起きた』じゃい！乱暴すぎだぞ！」

「仕方ないじゃい。いつまでもじゃれてる凌が悪いんだから」

「だとしても、もうちょっとましな方法があるだろっ！」

あまりの言い方に声を荒げる。

「それにいつまで引きずってんだ」

普段より低い声を出し、今の状況を確認する。

他人から見れば、ボク等の今の姿はかなり滑稽だろう。

特にボク。日本人形みたいな女の子に引きずられる男の子。

かなり不憫だ。

「つーか、人一人引きずれるコイツもどうよ。筋力ありすぎだよ・・・。

ちよっぴり情けなく感じる夏の放課後だった。

ドサツ。いきなり手を放されたボクの体は重力に従って落ちる。衝撃でハツと周りを見ると、見慣れた建物が目の前にあった。

どうやら、長い間思考の海に沈んでいたらしい。

「あゝ、疲れた」

左手首をブラブラさせながら槓は言った。

「だから離せって言っただろう」

「離せとは言われてないわ。引きずるなどとも言われてないわよ」  
だから、ここまで引きずってきたの。

凌は、溜息をつく。

昔からこの幼馴染は、人の揚げ足を取るのがうまい。  
わかっているても、イラつくものはイラつく。

気分を入れ替えるように、深呼吸をする。

琥珀園？

「予定より早く着いたじゃないか」

「いいじゃないの。早めに着いた方が色々と楽しいしねっ」

よほどの場所に来ることが楽しみだったのだろう。

鼻唄をいまにも歌いそうだ。

「本当に毎日よくやるなあ」

呆れを含ませて言う。

「アンタだつて人のこと言えないでしょ？」

確かに。あのキラキラと輝く子供達の無邪気な笑顔が嫌いではないから、毎日こうして通っているんだろう。

「ほら、もうそろそろ時間だよ」

地べたから立ち上がり、看板に視線を送って建物の中に入ってしまった。

『琥珀園』

そう看板に書いてあった。

---

---

入ると、アツという間に子供達に囲まれた。

「マホのおねーちゃんだ！」

毎日のように来ているので、すっかり子供たちと顔馴染だ。

ここの子供たちは親に捨てられた子供たちばかりだ。

中には逃げ出してきた子供たちもいる。

年齢層は、さまざまだ。細かく言えば、四歳から高校一年生ぐらいまでいる。

『琥珀園』は、そんな子供たちを見つけ、保護する場所である。いわゆる、孤児院だ。

「うん。そうだよ」

女の子と視線が合うようにしゃがみこむ。

離れた場所で楯を見ていた凌は、袖を引っ張られる感覚に気づく。足元に七歳ぐらいの男の子がいた。

「ん？どうした」

「にんぎょうげきやってくれるの？」

こてんと首を傾げる。

## 琥珀園？

「そうだよ。今日は海賊のお話だ」

そう言つて、軽く男の子の頭をなでる。

少年は、頭を撫でられたことが嬉しかったのか、照れくさそうな笑みを浮かべる。

そんな様子を見て口元がゆるむ。

「名前はなんて言つんだの？」

「柀世斗こころのせとつていうんだよ」

誇らしげそうに言う。

「いい名前だね。お兄ちゃんは、五十嵐凌つて言つんだ」

名前を告げるとなにやら悩ましげな顔をして何かを考え込む世斗。

「どうした？」

凌は、何かを考えだした世斗をただ見つめる。

「んー、じゃこれから凌兄つてよぶよー」

満面の笑顔を浮かべていう世斗に少しくすぐったさを覚える。

くしゃりと髪をかきあげる。

「おつよ」

少し顔が赤くなつたのを自覚した。

何の取り柄もないボクだけど、得意なものがある。

それは、マリオネットと腹話術。

それをいかし、劇を作つて子供たちに見せている。

話は、自分で作る時もある昔話で劇を作つてる時もある。

もつとも、昔話は時間がないときにしか使わない。

マリオネットは、ボクの姉・詩織が作っている。

家事は壊滅的なくせに裁縫は完ぺきという我が姉ながら意味がわからない。



琥珀園？

いかにもという雰因気を漂わせてる洞窟。

『ここですっ！キャプテン』

『よし。皆はここで待っていてくれ。俺一人で行く』

一人ひとりの顔を見まわしきっぱりと言い放つ。

『『『キャプテン！』』』

悲鳴のような声があちらこちらから上がる。

『大丈夫だ。かならず宝を持って帰るから』

安心させるように笑い、ジョーカーは洞窟の中に入る準備をする。

『それじゃ、行ってくる』

気味が悪いな。

空気がべたついてる。

十五メートルぐらい歩いただろうが、奥から空気が擦れる音が聞こえてきた。

『貴様が侵入者が』

『オウ！お前が《海の至宝》を守る番人か』

甲冑をきたクマが宝箱の前にいた。

『貴様なんかに宝を渡してたまるかっ！』

スラリと腰から剣を抜くとジョーカーに向かってかまえる。

『宝が欲しければ力づくで奪い取れ！いざ尋常に勝負っ！』

キン！カン！

たがいの剣が混じり合う。

『っは……！』

『……くっ』

琥珀園？

打ち合いを始めてから何分経っただろうか。  
お互いボロボロで息も乱れている。

『・・・いい・・・加減につ、諦めろっ』

『やなこつたっ！』

ついに運命の時がやってきた。

番人の一瞬の隙を突いて、ジョーカーは番人の心臓をついた。

グサッ！

『グワァー』

番人が倒れる。

『つい・・・に、《海の至宝》を手に・・・入れたぞっ』

膝をつき息絶え絶えで言う。

早く仲間の元へ戻らなくちゃ・・・！！

その頃、ジョーカーの帰りを洞窟の入り口で待っている手下たちは・・・。

『キャプテン。まだ帰ってこないよ』

うるうるとうろつく手下A。

『ああ、もうっ。うざい。落ち着け』

手下Aを叱咤する手下B。

『そっだ、手下Bの言う通りだ。落ち着け』

キャプテンは必ず帰ってくるし、宝も持ってくる。

だから、信じて待つんだ。

『でもっ・・・！』

なおも言い募るうとしてる手下A。

『ああもう、うるさいな！』

どこからか、猿轡とロープを出し手下Aをぐるぐるまきにする手





ガクリと肩を落とす手下一ズ。

『ってなわけで、新しい宝の在り処を探しに行くぞ。野郎ども！』

『『『ラジャー』』』

こうして、ジョーカー率いる海賊団は新しい宝の在り処探しに出発した。

-----

「ありがとうございます」  
パチパチパチ。

一礼をして、マリオネットの糸をはずす。

## 琥珀園？

「ふーっ」

深く溜息を吐く。

無事に終わってよかった。

毎日のことだけど、緊張感にはなれないな。

「凌兄」

片づけてると後ろから声がかかった。

「ん？どうしたの、世斗」

そこには、眼を輝かせてる世斗がいた。

「おはなしおもしろかったよ」

「それはよかった」

柔らかい髪の毛をかき混ぜる。

「あのおはなし続けるの？」

「うん、どうだろうな？気が向いたらしようかな」

「えへえ。ぼく続きがきになるよお」

ボクのTシャツを引っ張り駄々をこえる。

「考えとくよ」

ここには、この子達が甘えられる相手が少ないので、できる限りの事を叶えたいと思ってしまう。

いくらこの場所が我が家のように思えても、血の繋がってない人たちに甘えることは難しい。

皆極力迷惑をかけないように過ごしている。

そのため、ボク達みたいな外部の人が必要になる。

理由はとても簡単だ。四六時中過ごさないからだ。

「ほら、次はマホ ツカイのお姉ちゃんの番だ。見てきな」

「うん。また後でね」

「うん」

バイバイと手を振り、櫃の方へと行く世斗を見送る。

「さてと、見回りでもしてこようかな」  
檣のマホーは、見なくてもわかる。  
練習に付き合わされてるからね・・・。

## 琥珀園？

ホントに今日はいい天気だ。  
寒すぎず暑すぎず。風が穏やかに流れている。

ベンチに座り空を仰ぐ。いつもは賑わう中庭だが、今はお楽しみのため誰もいない。

凌はこの時間が好きだった。何もせず、考えず時間だけが通り過ぎる。

「平和だな」

ポツリとこぼす。

子供たちと触れ合う時間は好きだ。見てるだけで、元気が貰えるよ  
うな気がする。

しかし、どうしても人形を操った後は一人でいたかった。

なぜだかわかんない。

わかんなくていいとも思う。

見回りは、建前で一人になるとというのが目的だった。榎もその  
ことを分かっている。

にゃー。

どこからか鳴き声が聞こえた。

「ねこ？」

確かここは動物持ち込み禁止なんだけどな……。  
たぶんどこからか忍びこんで来たのだろう。

「どこにいるのかな？」

あたりを見回すが、それらしき影が見当たらない。

「どこにいんのかな？」

ベンチから立ち上がり、茂みのあたりを見る。  
みゃー。

「お、こんなところにいたか」

目の前にちょこんと座っている三毛猫がいた。

「かわいいいな、お前」

頭をなでると、すりつけてきた。

「お前、ノラなのか」

けど、いつまでもここにはいちゃいけないね。

三毛を抱き上げ、子供達のところへ向かう。

もうそろそろ櫛の手品も終わる頃だろうね。

琥珀園？

ロビーについたとき、ちょうど檣のマホーが終わっていた。

「おつかれさん」

ゆっくりと檣に近づく。

「随分ゆっくりしてたのね」

「うん。ちよつとな」

腕に抱えてる猫を抱きなおす。

「どうしたの、その猫？」

「中庭に迷い込んでいたんだよ」

「だから、連れて来たのね」

「察しが早くて助かるよ」

「いやー。」

同意するように三毛が鳴く。

さっきの猫の鳴き声で、子供たちの視線がこっちを見る。

「そのねこさんどうしたの？」

絵梨が言う。

「庭にいたんだ」

「さわっていい？」

「いいよ」

威嚇されないようにゆっくりと猫を絵梨の手にゆだねる。

「ふわふわしてるー」

にこにここと笑い、毛並みを堪能する。

「このこ男の子？女の子？」

頭を撫でていた健太がきく。

「どつちなんだろうな？」

「「わかんないの？」」

絵梨と健太は檣に聞いてみる。

「あたしもわかんないわ」

「なんだー」

ガクリと肩をおとす健太。

「園長に聞いてみればわかるんじゃないのか」

「そうしてみるー！」

そういって園長室に走って行った。

琥珀園？

「ハハッ、興味シンシンだな」

そう言ってる凌の眼は穏やかな光を帯びて二人の背中を見ていた。

「いいじゃないの。動物はめったに見れないんだから」

「そうだな」

ほのぼのした空気が流れる。

「りょー！」

という叫び声とともに背中に衝撃が走る。

「ぐはっ・・・！」

勢いとともに床に激突した。

「・・・っ。いつてー。なにすんだ！秋ー！」

元凶を怒鳴る凌。

「ヘッヘエー！すきありー！」

今だ凌を馬乗りに行っている秋ー。

「いい加減降りろ！重いんだよ」

「やだー」

「いいから降りろ！」

「いやなもんはいやだ！」

駄々をこねる。

凌は思わず溜息を吐いた。

普段からわがママを言う秋ーだが、限度を知ってるのでここまでわがママは言わない。

「・・・どうした？秋ー」

このさい床に寝転んでいることは気にしない。

まずは、目先の問題を解決しなくてはどうにもならないだろう。

「・・・」

急な呼びかけにうつむく秋ー。

「言ってくれなきゃボクはわからないよ」

やさしく声をかける。

「・・・って」

「ん？」

「だって最近かまってくれなかったじゃないか！おれのこと、りよー、キライになったの？」

ワガママ言っただけだからっ・・・！」

涙声で必死に訴えかける秋一。ギョツと凌の制服をつかんで泣かないように耐える。

## 琥珀園？

必死の訴えに凌は目を大きく見開く。

そして、最近の自分の行動を顧みる。

確かにここ二、三日は秋一の相手をしてない。

テスト期間に入っていたので忙しかったと言えば忙しかったが、これは言い訳にもならないししてはいけない。秋一のココロを傷付けることになる。

「ゴメンな」

そう言い、秋一の脇の間に手を入れ持ち上げる。そのまま、体制を変える。

そして、膝の上に座らせ抱きしめた。

「大丈夫。嫌いになったりしないし、嫌いになったことなんて一度もない」

「・・・ほっ・・・ほんと？」

「本当さ」

よしよしと頭を撫でる。それでホツとしたのか本格的に泣き始める。「うっ！・・・うっ！・・・えええええん！」

その様子に凌は安心した。

はあ、よかった。

泣きだした様子を見て安心するのは可笑しいと思うけど、これでいい。

世間ではもう秋一のは十歳で、皆よりは落ち着いて明るいと大人たちは言うけどそれは違つと凌は思う。

まだ十歳で精神にむらがある。

おちゃらけた性格とは反対に冷静に物事を判断する部分はあるけど、軽い揺さぶりだけで脆く、崩れやすい。

今回の事もそうだ。ほんの数日だけの触れ合いがなかっただけで、これだ。

なついてくれるのは嬉しいが、これからは大人になってくので甘やかすのはいけないな、とは思いつが  
つい反射的に手を伸ばしてしまつ。

琥珀園？

「あー、ほらいい加減泣き止め！男の子だろう」  
リズムよく秋一の背中をたたく。

今まで傍観していただけの槿が口をはさむ。

「あら、泣かしたのは凌でしょ？相手しなかったんだから」

「そういわれてもなあ……」

お前だつて分かるだろう？

途方に暮れた凌の眼が雄弁に訴えかける。

やれやれ、我が幼馴染様は御困りのようね。世話の焼ける。

槿は今だ泣きやむ気配がない秋一を見る。

凌がここ数日秋一に逢わなかつた意図は知ってるし、あたしもその立場ならやつてるね。

彼らは孤独の故ココロに大きな穴を持っている。大きさは個人差と過去に関係性があるが、その中で秋一はとりわけヒドイ。

さて、どうしたもんか……。

困惑にたたずんできると園長室にいった健太と絵梨が戻ってきた。

「りょーにいー、まきねえー」

秋一の様子には気付かず、槿のところへかけよる。

「どうだった？性別分かった？」

「うんっ！女の子だったよー！」

「そっかー、女の子だったか」

「えんちようせんせいは、ものしりだねー。ね、けんた」

猫とじゃれていた健太は曖昧な返事を返す。

「ちよつと、えりのはなしきいてたの」

ぷくうー、と頬を膨らまし、健太の方へ行つた。

## 琥珀園？

スー、スーとボクに体をあずけて秋一は寝ていた。

泣き疲れと不安から解放されてすっかりと安心したようだ。

ふと、周りを見渡すとボク達を中心に円を書くように子供達も寝ていた。

「お疲れ様」

「・・・榎」

子供たちを起こさないように注意深く凌のそばによる。

「くすつ、静かになつたわね」

「まあな。それよりお前がボクを労わるなんてキモチワルイナ」

おかげで全身に鳥肌立ったよ。榎が榎じゃないみたいだ。

「失礼ね！」

バシン。ものすごい力でボクの背中をたたく。

「・・・っ」

あまりの痛さに悶える。・・・情けないな。

「あたしに、口答えするのがいけないのよ」

そんなボクを見て声高く笑う榎。鬼だ！ここに鬼がいる！

「なんつー馬鹿力だよ」

「フッフ、なんか言つた凌？」

黒い笑みを浮かべる榎。ついでに黒いオーラも背負っている。

ヤバいな。命の危機を感じるのはボクだけかな？

「イイエ、ナニモイッテマセン」

穏やかな雰囲気按比例して、冷たい空気が流れる。

「そういえば今何時だ？」

ふと思いだして榎に尋ねる。

「えーと、あともう少しで七時よ」

「そうか。もうそんな時間か」

今日は、色々あったから時間の感覚がなくなつてたよ。

琥珀園？

「そろそろ皆起こさなくちゃね」

「ああ。でも、こいつらいつから寝始めたんだ？」

「そんなのどうでもいいでしょ！早く起こさなくちゃ夕御飯の時間が来ちゃう」

そう言っつて、周りで寝ている子供たちを起こしにかかる。

槇から視線をそらし、今だボクの上で睡眠を貪る秋一を見る。

あーあ、幸せそうな顔して寝ちゃつてるな。

なんとなく、起こすのがかわいそうになって寝顔を見ていたら罵声が飛んできた。

「凌！何やってんのっ！！早く秋一起こしなさい！」

まさに鬼にも負けない声がボクの鼓膜に襲いかかる。

「分かった、分かった。起こすから……」

はーあ、怖かった。ったく、あんな顔して怒んなくてもいいじゃないか。

美人が怒るとさらに迫力が増すんだから。さて、さっさと起こしますか。怒られるのは嫌だからな。

「ほらっ！秋一起きる」

軽く体を揺さぶる。

「うっ……ん……ん……」

秋一は体を少し動かしたただけでまた寝に入る。

「しゅーいち！！寝るな！夕飯の時間だぞ」

凌は、秋一を寝かさないようにさっきよりも激しく揺さぶり始める。

「んーんー、まだ……ね……むい」

しぶとく睡魔にしがみついている秋一に、溜息を吐く。

昔からこういうことは度々あった。だいがマシになったと思ったんだけどな……。昔よりひどくなってるんじゃない！！

「ほらっ！いい加減にしろっ！そいてさっさと目を覚ませ」

「・・・っ。おはよー凌兄いー」

「おはよ。やっと起きたか」

人を起こすのつてこない疲れる事だったっけ……。そんな事を考えてると、思いつきり肩を掴まれた。

「秋一起きたー？」

「ああ、何とか起こしたよ」

力が入らない声で返事を返す。

「そう。園長先生が夕ご飯と一緒にどうぞ、だつて」

どうやら、榎はボクが秋一を起こしにかかっている間子供たちを食堂に連れて行き、夕食同伴の許可も得ていたようだ。

「なら御言葉に甘えて食べていこう。お腹が減りすぎて死にそうだ」

「あたしも」

二人は、お腹をすかせて待っている子供たちのところへ急いで行った。

## 琥珀園？

夕食をとり、なんだかんだで子供たちの相手をしていたら、帰りにつくのが九時ぐらいになつていた。

「そろそろ帰らなくちゃな。明日も学校あるし」

「えー、絵梨まだりよーにいと遊びたいー」

「駄目だよ。子供はそろそろ寝る時間だ」

「むー」

むくれる絵梨。毎日来て遊び相手をしてやってもまだまだ遊びたい盛り。

遊んでも遊んでも物足りないのだ。

「そうよ。お兄ちゃんの言う通りよ。早く寝なくちゃ大きくなれないわよ」

「それはやだっ！早く大人になりたい！」

「それならもう寝なくちゃな」

促されて布団が敷いてある部屋に向かわせる。

「お休み。いい夢を」

「おやすみなさい」

全員が寝静まつたころ、榎と凌は帰る支度を始める。

「家に連絡は入れた？」

「大丈夫よ。帰りが遅くなるって言っただいたわ」

「そうか」

自分たちの支度が終わったので、使っていた部屋を片付ける。

「凌君、榎ちゃん」

不意に後ろから声をかけられる。

「あ、園長さん」

『園長』という言葉に振り返る。

「どうも」

「こんばんは。今日は遅くまで遊んでもらって悪いわね」

「いいえ。こちらも夕御飯頂きましたから」

「部屋も片づけておきました。また明日きます」

そう言っただけは、荷物を持ち玄関の方へ行く。

「本当にいつも毎日来てくれてありがとうございます。皆喜んでるわ」

「こちらもお好きでやっておりますから」

そう。横の言う通り。ここに来るのが楽しくて気が付いたら毎日通いつめるようになっていた。

「「おやすみなさい」」

「おやすみなさい」

園長は、ボク達の姿が見えなくなるまで見送ってくれた。

## そんな日常

夏休みが始まる一か月前。

ボク達は相変わらず琥珀園に行つては、劇とマホーを見せ子供たちと遊び、そして帰る。

これが最近ボクと槇の毎日だ。

「最近はずっといいな」

今、ボクは琥珀園にある中庭のベンチに座つて空を眺めている。

今日はそんなに暑くもなく心地よい風が吹く。

「何言つてんの。あと少しで期末よ」

空を眺めてるボクとは反対に教科書を眺め勉強をしてる槇。

思わず眉をしかめる。

「よくやるなあ。いい天気なのに……」

「あたしとアンタは脳の構造が違うの。教科書読んだだけで分かるわけないわよ」

夜叉の眼をしてボクを睨む。おおー、こわっ！

自分だつて毎回上位三位に載ってるから頭がいいことには変わりない。

ちなみにボクは毎回学年一位。それが槇には許せないそう。

槇曰く、大した勉強もしないで遊び呆けてるボクが許せないそう。仕方ないじゃないか。読んで分かつちゃうものは分かつちゃうんだ。

ボクのせいじゃない。この脳をくれた神様のせいだ。

怨むならこの脳を授けてくれなかった神様を恨め！

んな事を、ブツブツ心のうちで呟いてたら槇の視線が一層強くなつた。

レベルで言つと、死人の魂を狩にきた死神だろう。

「ふーん」

これ以上なんか言つと精神的ダメージが待ってそう。

「それより明日はどうしようか」

「期末対策」

ボクの言葉を一刀両端す冷たい武器。

さて、ここで疑問に思った方はいるだろうか？

本当なら明日もここで過ごすつもりだったのだが、園長さんから急な話が入ったのだ。

そんな日常？

「「こんにちは」」  
シーン。

いつもなら子供たちが来て、いろいろとせがんだりして賑やかなのだが今日は来る様子もない。  
耳を澄ましてみると中庭の方からかすかに子供たちの声が聞こえてきた。

「中庭の方にいるみたいね」

「そうみたいだね。今日はいい天気だし猛暑でもないからな」

「じゃあ、あたし達も行きましようかね」

「ああ」

ちょうど、ホールを抜けると園長さんが見えた。

「あ、榎ちゃんと凌くん。こんにちは」

「「こんにちは」」

軽くおじきをする。

「今来たところ？」

「ええ。これから中庭に行こうと思って・・・」

「うん。今日はいい天気だから全員外に出してるんだ」

「そうなんですか」

ほのぼのした空気が流れる。

この園長はいつもほわほわしてるなと思う。傍にいただけで癒されそうな気がする。

「ところで二人に話があるんだけど、ちょっといいかな？」

「別にかまいません」

「じゃあ、園長室まできてくれる」

「明日は来なくてもいいよ」

突然の言葉に絶句する凌と槇。

「・・・な・・・なんでですか」

なんとか声を振り絞って事情を聞く。

声が震えてるのはご愛敬だ。

「ああっ！ゴメン！ウチの言い方が悪かったね」

ボク達の狼狽ぶりに言葉が足りなかったことに気づく。

## そんな日常？

「実は、明日ピクニックに行くことになったんだよ」

「先にそれを言ってお下さい、園長」

無駄な衝撃を心に蓄積してしまっただじゃないか。

「うん。ごめんねー」

コテリと首をかしげ、謝る。

時々ボクは、この人の年齢が分からなくなる。

実年齢は知らないが、顔が童顔なので幼く見える。

身長は目ばかりで百五十三センチ。一般女性よりも低い。

つねにおっとりした空気を醸し抱いている。そのおかげ？かしらな  
いけど子供達には懐かれている。

「それじゃあ、明日は来なくていいんですね？」

凌は再確認する。

「うん。久しぶりの休み楽しんでね」

「ありがとうございます」

「ううん。いつもお世話になってるからね」

「じゃあ、皆の相手をしてきます」

これで話は終わりだろうと判断し、凌と榎はドアへと向かう。

「失礼しました」

二人がいなくなった部屋に園長の声が響く。

「ごめんね。いつも無理させちゃって・・・」

凌君達には感謝してもしきれないと思っている。

忙しいはずなのに、毎日欠かさず来てくれる。休みの日もだ。

子供たちが喜ぶ姿を見るのは好きだが、凌君達が無理する姿は見た  
くない。

彼等はまだ高校生で青春真っ盛りの最中だ。園長は、その事実を思  
い出しては胸が痛くなる。

思い浮かべる限り、学校から直でこちらに来てるからだ。

交友関係は？ちゃんと勉強は出来てるのだろうか？

二人の邪魔はしてないか気になってしまう。

二人は気にするなと言うが……。

人生で一時きりの青春時代だから琥珀園ばかりに来ないでもっと自由で過ごしてほしい。

その為にピクニック企画を立てたのだ。

明日ぐらいは、ゆっくりと休んでほしい。

## そんな日常？

気のせいかもしれないが、ここ二、三日凌君の顔色が悪かった。特に今日はひどい。倒れてもおかしくない顔色だ。

疲れが溜まってしまったのだろうか？

大丈夫かな、凌君。榎ちゃんもいるし大丈夫だと思っけど……不安だな。

――  
――

そんな不安を園長が抱いてると知らず、二人はのんきに歩いていた。

「ねえ、凌」

「ん？」

皆が描いた絵を眺めていたボクは、榎に呼びかけられ視線を移す。

「アంత、疲れたまつてるでしょ」

顔色が悪いわ。視線がそう訴えてくる。

「大したことじゃない。睡眠不足が祟っただけだよ」

「それでもひどいわ」

「皆にバレなきゃ平気さ」

そう言うと視線がより一層鋭くなる。

榎が心配していることは知っているが、そこまで酷くはない。

それは揺るぎない事実で、ボクの体調の事はよくボクが知っている。その事を榎に言っても聞かないだろう。

小さいころから一緒に過ごしてきた為、なんでもお見通しだし、心配性だ。

逆もその然り。ボクも彼女の事は何でも知っている。……多少

の語弊はあるが……。

「……………倒れても知らないからねっ！」

そう言つて樞がそっぽ向く。

そんな彼女の反応が予想通りで、つい笑つてしまう。

「何がおかしいのっ！せっかく人が心配してるのに…………！」

「ゴメンゴメン、なんでもない。心配してくれてありがとう」と

「当り前でしょ？幼馴染なんだから！」

誇らしげに樞が言う。

「じゃあ、晃輝も気づいてるかな？」

「どうでしょうね。あの子鈍いところがあるから…………」

肩をすくめて言う。

「無理しないで今日は早めに帰るよ。寝たら治る」

「そうしなさい」

二人はたわいもない話をしながら子供たちの所へと足早に向つ。

園長の心配は気付いてないようだ。

## 放課後の過ごし方

今日も昨日と同じ絶好の真夏日より。そしてピクニック日和だ。

「うつわ〜、なんだよこの暑さ！」

一歩冷房がきいた学校から出るとうだるような暑さが凌と晃輝を襲う。

「うるさいよ、晃輝。余計に暑くなるだろ」

「どういう意味だ！」

「そのまんまの意味だよ。ギャースギャース騒ぐな」

軽くあしらえば、晃輝は悔しそうな顔で凌を睨む。

「爽やかクンもだいたいしだな」

そして、凌は晃輝の視線も気にも留めずさらに煽る。

「・・・っ！わかった！わかったから何でそんなに不機嫌なんだ」

「べっつに〜。晃輝に気のせいだって」

（気のせいじゃない！気のせいじゃない！明らかに黒いオーラ背負ってるんじゃない〜）

なんてことは口には出せず、さつきから気になってる事を聞いてみる。

「りょー。今日は行かないのか？」

「・・・」

「行かないんだな」

沈黙が何よりの証拠で、いつも迎えに来るはずの櫛が来ないことで確信していた。

していたが、もしかしたらのもしかしたらのもしかしたらで行くかもしれないので念のために聞いてみたらこの有り様だ。

「今日はピクニックなんだってさ」

「へえ〜。いいじゃないか。お前もゆっくり休める」

「そ・・・うなんだけど、久しぶりにゆっくり過ごすから予定がな

いんだよ」

そう。ボクは困惑していた。

こういう風に放課後を過ごすのは本当に久しぶりで、何をして過ごせばいいのかからない。

晃輝の方を見ると何やら考え込んでいた。

どうせ下らない事だろうと放置して、暑さに参ってる人々を眺める。

「なあ、凌。何もすることがないんだったら、これから遊びに行こうぜ」

「ん〜、別にいいよ。ボクアイス食いたい」

「よっしゃ！決まりだな！久しぶりにお前と遊ぶな〜」

ボクと遊ぶのがそんなに楽しみなのか、キラキラオーラが出てる。

うっわ〜、キモイ。女の子たちは、そんな晃輝をハートの眼で見てる。

美形は得でいいなっ！！うーらーやーまーしーいー！！

## 放課後の過ごし方？

「んじゃ、アイス買いに行くか」

「ん。コンビニ？」

「いいや。つい最近できたアイスクリーム屋があるんだ。そこに行く」

「だらだらと重い足を運びながら、今からの予定を立てる。」

「へえ〜。人気なんだ」

「ああ」

昔から晃輝が美味しいものを見つけるのが好きで、よく買い食いを三人でした。

なので、晃輝が気に入った店はかなり美味しい。

「じゃ、そこで食べよっか」

「その後はどうする？」

「アイス食べながら考える」

「了解、ボス」

ふざけあいながら、アイスへの道を急いだ。

「ここだよ」

「凄いな。かなり人気なんじゃないの」

その店は、かなりの数のお客さんが並んでいた。

「種類も豊富だよ」

「美味しそうだな」

周りを見渡すと、色とりどりなアイスを持った人たちがいる。

「おすすめは、チョコミントとヘーゼルナッツチョコアイス」

ぶら下がっているメニュー表を見ながら晃輝が言う。

「じゃあ、ボクはベリーアイスで」

「っておい！せっかく人がお勧め教えてんのに、違うチョコイスする

「なよ・・・」

「いいじゃないか。食べたいんだから」

「そう。あくまでお勧めであってボクの食べたいものじゃない。」

「お勧めはだれが食べてもおいしんだから、違うのが食べたくなるのが人間の心理っていうものだよ。」

「ねえ、違う？」

「ボクはそうなんだけどね。」

「はいはい。お前はそういう奴だよ。注文してくっから待ってる」

「あんがとー」

## 放課後の過ごし方？

ほどなくして、晃輝が人込みを避けながら戻ってきた。

「はいよー。お待たせ」

「ありがと。後で代金払うよ」

「いいや、今日は俺のおごり。久しぶりに遊ぶからさ」

「でも悪いって！ちゃんと払うから・・・」

「いいの。俺がおごりって言ったからおごり。これ絶対！」

そう言つて、晃輝はアイスにかぶりついた。

「早く食わないと溶けるよ」

これ以上何を言つても無駄だと判断し、ボクも食べ始める。

「ん〜、おいしいっ！」

晃輝のお勧めの店だけあつて、とてもおいしい。

味も濃厚で、ポリウムもたっぷり。

ベリー系も程よく凍らせてあつて、舌触りもグッド。

「だろだろっ！さすが俺だよな！」

なぜか自慢げに胸を張る。

「凄いいはお前じゃなくて。このお店だ」

「少しは褒めてくれてもいいんじゃない？誰のおかげでこのア

イス食べれるんだっけ」

にやにや笑つて、ボクの言葉を待っている。

つち。その手で来たか。

確かに晃輝のおかげでこのアイスにありつけている。

ボク一人だったら、コンビニのアイスで終わっているだろう。

だからといって、素直に「ありがと」。さすが晃輝だな」と言うのは嫌だ。

なぜか？そりゃあ、癪にさわるからだ。

「・・・」

ボクは、何も気になつたことにしてアイスを食べることに専念する。

「なあなあ。早く言えつて」  
ボクの様子を見て、照れくさがつてると判断したのか顔全体が緩く  
なっている。

「・・・・・・・・」

無言を貫ぬきアイスを食べるボクとにやにや笑いのイケメン。

他者から見れば奇妙な光景だろう。

## 放課後の過ごし方？

ピリリリリ。ピリリリリ。

ボクと晃輝の間にある微妙な空気の中、携帯が鳴る。

「ゴメン。ボクのだ」

「一応謝つといて、電話の出る。」

「はい、もしもい」

『あ、凌君かい？私だ』

聞こえてきたのは、園長の声だった。

「園長！？」

驚きのあまり大声が出てしまった。

『突然でごめんね。せつかくの休みだったのに……』

「そのことは別にいいんですか……。どうしたんですか？」

園長はよほどの事がない限り、携帯の方にはかけてこない。

『うん。実は世斗の様子を見に行つてほしくて……』

「世斗に何かあったのですか？！」

明るくて人一倍甘えん坊な少年の姿を思い描く。

『実は……』

園長の話によると、ピクニック広場で遊んでいた世斗達。

だが、めずらしい蝶を見つけた世斗は皆の目を盗んで林の中へ。

無我夢中で蝶を追っていた世斗だが、気がつくとも迷子になっていた。

「どうしよう……。えんちよーせんせーのところまでもどれないよ〜」

今にも泣き出しそうな顔で、自分がいる場所を確認する。が、あたり一面緑に覆われているので、今どこにいるのかさえもわからない。

そのころ園長たちは、世斗がいなくなつたと子供たちが駆けつけて来たところだった。

「きづいたらせとくんがいなくなったの!!」

「ああ！後ろ見たらせとのやつどこかに消えちまってやんの」

「だから、ちゃんとお手てつないだ方がいっていったのに」

上から、由美、崇、絵美の順で口々に言う。

## 放課後の過ごし方？

「どこに行ったか分かるかな？」

うくん、三人とも悩みだす。

「あ！林の方に行つたのをちらつと見た」

崇が言う。

「そっか。ありがとう。・・・渡来先生！」

園長は、二、三人の子供の相手をしていた女先生に声をかける。

「なんですか？」

「私は世斗君を探してくるんで、渡来先生は皆を園に帰してください  
い」

「わかりました。気をつけて下さいね。暗くなつていくので・・・」

「ありがとうございます。では、後はよろしくお願いします」

そう言つて園長は世斗を見たという林がある場所へ向かう。

（今行くから待っててね）

「おなかへつたな」

世斗は、今だ林の中から出れないでいた。

それにお腹も減ってきてしまった。

「歩くのも疲れちゃったから、どこかで休もう」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8974k/>

---

マホ ツカイがいる町

2010年10月15日22時35分発行